月刊 名大文学部

第 88 号
発行：名古屋大学文学部
広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp

教員コラム―No.86

明恵上人の愛した子犬

伊藤　大輔（美学美術史学）

明けましておめでとうございます。2018 年は戌年ですね。犬派か？猫派か？ときかれたら，圧倒的に猫派の筆者ですが，この一年の犬たちの活躍は楽しみにしたいと思います。日本の絵画の世界でも，数の上では犬を描いた作品が多く，可愛らしい猫の姿は猫好きで有名な江戸後期の歌川国芳が積極的に取り上げるまであまり見かけません。

それは犬が安産・多産のイメージと結びつき子孫繁栄を意味する吉祥性を持っていたからでしょう。モフモフの子犬達が動き回る姿は，無条件に善きものをイメージさせます。

古い時代の作品で印象的な犬の姿と言えば，高山寺の明恵上人が手元に置いて愛玩した彫刻の子犬像が挙げられるでしょう。明恵上人は鎌倉時代初期に活躍した僧侶で，俗世に紛れることを嫌い，山中で修行三昧の生活をおくりました。釈迦の原点に帰るために孤独な修行に勤しんだのですが，修行生活の中でも自然を崇敬しその素晴らしさを和歌に詠み，命ある花や鳥や動物たちのみならず，小石や島とも心を通わせるナチュラリストでした。犬はいわば人と自然の中間にいて両者をつなぐ存在です。明恵は，子犬の像を手元で愛でながら，この像を窓口に自然の声に耳を傾けようとしていたのではないでしょうか。

明恵上人はまた夢を仏の啓示と考えて，自分の見た夢を克明に記録に残しましたが，その『夢記』には黒い犬は罪業を示し，白い犬は善と書き残しています。この子犬像は現在黒いですが，元々は白く塗装されていたそうです。明恵を思慕する人々が，毛繕いやトリミングをするように像を磨き上げたため黒い地肌が浮かび上がってきたといいます。とすれば，明恵も黒い犬はもはや滅罪されたと考えてくれるのではないでしょうか。高山寺と関係の深かった慶派の湛慶が作った日本の動物彫刻の傑作とされています。

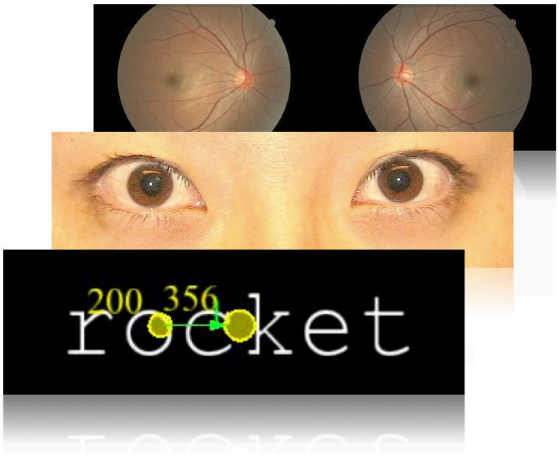
分野・専門紹介―File17

心理言語学者が飛ばす rocket

分野・専門名：英語教育学

英語教育分野と聞くと「英語能力向上のために効果的な教育手法を探る」というイメージを持っている方が多いかと思われますが，そもそも英語能力，言語能力とは何なのかと，あれこれ悩みながら実験を重ねることが心理言語学者である私のお仕事です。例として，10 秒前に rocket を飛ばしてみました。私が紙の上に提示した rocket は，意味を持たない刺激として，読者である皆さんの眼の瞳孔へ向かって飛び立ち，眼底から視神経に運ばれて，数百ミリ秒で皆さんの頭の中の “宇宙” に到達したはずです。その rocket の速度はそれ自体の特性（例：フォントサイズ）に影響されますが，興味深いことに，“宇宙” の特性によっても影響され，それは眼の動きに現れます。rocket のような 1 つの単語のみを認識する場合，眼は 2 点で情報を集めることが多いようです。私の場合は，200 ミリ秒と 356 ミリ秒の 2 回に分けて，rocket の情報が運ばれました（写真）。この第一注視点の 200 ミリ秒は北京五輪男子 100m 決勝の優勝者ボルト選手と準優勝者の差に等しいです。驚くべきことに，この 1 回目の情報収集ですで

に（私たちが意識的に rocket と認識する前に）単語をどれだけ頻繁に見聞きしたかという情報（例えば，rocket は spaghetti や athlete より頻繁に使われているという情報）を私たちの眼が活用していることがわかっています。“宇宙”に到達した rocket はさらに，類似した単語（例：pocket, ticket, ロケット）にも働きかけます。rocket という単語一つを目にしただけで，少なくともこれだけの事が起こっているのですから，それを文中，ストーリー中で理解することはかなり複雑で興味深いプロセスです。ああ，しかし，残念なことに・・・この余白はそれを記すにはあまりにも狭すぎます・・・詳しくは大学で！（三輪　晃司・准教授）



（写真下から，私の眼球運動，私の眼，私の眼底）

分野・専門紹介―File18

考古学の魅力

分野・専門名：考古学

みなさんの考古学に対するイメージはどのようなものですか？エジプトのピラミッド？インディ・ジョーンズ？少し詳しい方だと縄文土器や前方後円墳などを思い浮かべる方もいるかもしれません。考古学はそのような過去の人々が残した遺跡や物から人類の歴史を解明していく学問です。歴史の教科書に書いてある内容の大半は文字のある時代に書かれた文献から明らかになった歴史です。しかし，文字のない時代，例えば私が研究している縄文時代のこと，また，文字のある時代でも，文字に残らないことについて知りたいと考えたとき，考古学ではその当時人々が使っていた土器などの道具を手掛かりにして歴史を明らかにしていくことができます。

（学内での発掘調査の様子）

考古学では論文を読んで知識を得ることも必要ですが，フィールドワークで遺跡の立地について実際に観察したり，発掘調査で研究の対象となる遺跡を発掘したりと野外での活動も重要になってきます。考古学研究室では毎年発掘調査をおこなっており，そこで発掘調査のスキルを学ぶことができます。また，エルサルバドル共和国での発掘調査に参加することもでき，日本国内のみでなく，海外での考古学についても学ぶことができます。発掘調査以外にも遺跡や博物館に研究室のメンバーで訪れることもあり，かなりアクティブに活動を行っています。

このような活動を通して，考古学研究室は同級生はもちろん，上級生も下級生も学生同士の仲が良く，毎日楽しく研究しています。みなさんもこのような考古学研究室で一緒に研究してみませんか？

（山内　良祐・博士前期課程 1 年）

最近の文学部

新年早々おめでたい八八号（末広がり）です。

名大文学部の名物の一つは卒論提出日がとても早いこと。今年は 1 月 4 日の 16 時でした。お正月返上で間にあわせた人，年内に頑張ってお正月を死守した人… この号が出るころは，数名の教員に囲まれて質問攻めに合う恐怖の論文口頭審査の最中です。（YK 記）

＊本紙では，名大文学部の多彩な内容を順に紹介していきますが，それまで待てない人は…
名大文学部の WEB サイト　https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/　まで（『月刊名大文学部』のバックナンバーもあります）